

# ニュースレター

発行者  
キリスト教礼拝音楽学会  
〒145-0071 東京都大田区田園調布 2-48-12-501  
TEL/FAX 03-3721-0891  
発行日 / 2009年4月1日

## キリスト教礼拝音楽学会 第9回大会案内

### テーマ: 北ドイツのプロテスタント音楽 — バッハ以降を中心に

参加申込書でお申し込みください。多くの方のご参加をお待ちいたしております。

日時: 2009年6月6日(土)  
10:30 ~ 16:30  
「明治学院バッハアカデミーによる特別演奏会」  
17:00 ~

会場: 明治学院大学白金キャンパス  
学会大会: アートホール 特別演奏会: チャペル  
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37  
TEL 03-5421-5409 FAX 03-5421-5170  
(お問合せ: 090-4223-0805 手代木)

主催: キリスト教礼拝音楽学会

参加費: 会員 ¥3,000 / 非会員 ¥4,000  
明治学院バッハアカデミーによる特別演奏会  
… 入場料 ¥3,000 (会員に限り ¥1,500)

### プログラム:

10:30-12:00 基調講演… 樋口隆一(明治学院大学教授)  
12:00-12:30 総会  
12:30-13:45 昼食、懇談会  
14:00-16:30 研究発表… 久保田慶一(東京学芸大学教授)  
佐藤 望(慶應義塾大学教授)  
加藤 拓末(NHK-FM「ロックの森」解説者)  
ほか  
ディスカッション… 司会: 金澤正剛(当学会会長)  
17:00 ~ 明治学院バッハアカデミーによる特別演奏会

### 参加申込:

5月17日(月)締切。

#### ①大会案内について

大会案内の申込書に記入し、下記宛に郵送でお申し込みください。参加費は郵便振替口座(キリスト教礼拝音楽学会東北地区部会02240-3-46335)に大会費と明記し、お振込みください。

#### ②「明治学院バッハ・アカデミーによる特別演奏会」「明治学院バッハ・アカデミー」参加について

上記と同様、大会案内の申込書に記入し、お申し込みください。なお、演奏会の入場料と明治学院バッハ・アカデミーとの懇親会の会費は、当日会場にてお支払いいただきます。大会参加費と一緒にのお振り込みはなさないようお願い致します。

※懇親会主催: 明治学院バッハ・アカデミー合唱団 / 会場: 本館10F 大会議室 / 会費: ¥4,000

### 申込先:

〒145-0071 東京都大田区田園調布 2-48-12-501 手代木方キリスト教礼拝音楽学会大会係  
TEL/FAX: 03-3721-0891 (手代木) Email: gammo@ka2.so-net.ne.jp



### 交通アクセス

- 品川駅から  
[JR山手線・京浜東北線・東海道線・横須賀線・東海道 新幹線 京浜急行線]  
高輪口より 都営バス「目黒駅前」行きに乗り、「明治学院前」下車 (乗車6分) ※徒歩の場合は17分
- 目黒駅から  
[JR山手線 東急目黒線 東京メトロ南北線 都営地下鉄三田線]  
東口(ロータリー側)より 都営バス「大井競馬場前」行きに乗り、「明治学院前」下車 (乗車6分)  
※徒歩の場合は20分
- 白金台駅から  
[東京メトロ南北線 都営地下鉄三田線] 2番出口より徒歩 約7分
- 白金高輪駅から  
[東京メトロ南北線 都営地下鉄三田線]  
1番出口(目黒駅側 / エレベーター有)より徒歩約7分
- 高輪台駅から  
[都営地下鉄浅草線]  
A2番出口より徒歩約7分

詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/access/>

# 明治学院と音楽(讃美歌)

手代木 俊一

本年度の大会は明治学院のアートホールで行われる。過去にも2度明治学院で大会が行われたが、今回は多少事情が異なる。前回までのように明治学院の教室やホールを単なる大会の会場としてお借りするのではなく、明治学院大学のバッハ・アカデミー(芸術監督:樋口隆一文学部教授)からご協力を得られることになり、いわばハードとソフトの両面から明治学院に協力していただくことになった。これによりキリスト教礼拝音楽学会の大会として相応しい場所(アートホール)で大会が行われるばかりでなく、チャペルでのバッハ・アカデミーによる大会のテーマ(「北ドイツのプロテスタント音楽—バッハ以降を中心に」)にそった演奏を聴くことができることになった。

私事にわたって恐縮だが1昨年の7月から明治学院歴史資料館に週2日(この4月から4日)、明治学院150年史編集委員として勤務している。冒頭に「今回は多少事情が異なる」と申し上げたが、今回の大会は内部の人間としての対応も兼ねることになった。明治学院の150年史では音楽の項目も担当することになっている。ここで「明治学院と音楽(讃美歌)」に触れ、明治学院で行われるキリスト教礼拝音楽学会大会に少しでも関心を持っていただくことになればと思う次第である。

明治学院大学の文学部芸術学科には音楽専攻があり、大学院博士課程までのコースが設けられ、樋口隆一氏(『バッハ』新潮社他、オーストリア芸術功労十字賞他受賞)、岡部真一郎氏(『ウェーベルン』春秋社)が教鞭をとっておられる。また、冒頭で紹介のバッハ・アカデミーは2000年2月の創設で、数多くのコンサートを行い、CDを作成している。オルガニスト長谷川美保氏も宗教センターに勤務、明治学院はキリスト教音楽が充実しているという印象を受ける。また同窓生には音楽家も多く、ポピュラー音楽では、アルフィー、叶正子(サーカス)、新沢敏彦、田代美代子、南こうせつ、南佳孝等。またクラシック音楽では声楽家、藤原歌劇団主催の藤原義江、東京芸術大学名誉教授広野嗣雄(オルガン)等を輩出している。音楽のクラブ活動(文化団体連合会:管弦楽団、グリークラブ、L.M.S、マンドリンクラブ、Acoustic Minds、愛好会にも所属する団体が多い)も盛んで卒業生との絆も強い。

このように音楽が盛んなのは明治学院の創設時からで、建学の精神(キリスト教)に起因していると思われる。明治学院の源流を辿ると複雑であるので、ここでは関連の部分の概略を述べるにとどめる。明治学院ははじめ普通学部だけで、明治学院神学部は東京一致神学校が移ってきたものであり、その前身はブラウン塾であった。明治学院普通学部の前身は東京一致英和学校であるが、これは築地大学校と先志学校が合併したものである。築地大学校の前身はバラ学校、またその前身は1863年横浜のヘボン塾で、現在ではこのヘボン塾を明治学院の起点としている。先志学校の前身の1つにはバラ塾がある。築地大学校、東京一致英和学校、東京一致神学校は、ともに築地の

居留地にあった。この居留地には洋楽が満ち溢れており、多くのキリスト教主義学校が誕生している。居留地は近代日本における洋楽とキリスト教の発祥の地であり、洋楽とキリスト教は深く結びついている。音楽界の巨匠山田耕筰や宮城道雄も、幼少の頃居留地で聞いた洋楽の影響を後に述懐している。築地居留地にあった明治学院の前身校の卒業生には、内田糸太郎(作曲家、群馬師範学校音楽教授、明治19年東京一致英和学校卒)、納所辨次郎(作曲家、《兎と亀》他を作曲、明治19年東京一致英和学校卒)、小山作之助(《夏は来ぬ》他を作曲、明治14年には築地大学校在籍)、北村季晴(《長野県歌》他を作曲、明治24年普通学部卒の島崎藤村と同期・普通学部中退・東京音楽学校卒)がおり、日本の唱歌の原点となっている。またその後、キリスト教音楽家・讃美歌作家を輩出しており、ここで歴史的に人物を中心にこれを跡付けていきたい。

明治学院歴史資料館の会議室には創設に関った3人の宣教師、ヘボン(1815～1911)、フルベッキ(1830～1898)、S.R.ブラウン(1810～1880)の肖像画が掲げられている。1859年の開港とともに来日した3人の宣教師は音楽(讃美歌)にも大きく関わっていた。ヘボンは趣味ではあったがフルートを奏し、フルベッキは『新撰讃美歌』(明治21年)の編纂、『讃美歌 全』(明治14、15、16年)の伴奏譜を作成した。ブラウンも『讃美歌 全』(明治14、15、16年)を編集、オルガン演奏にも長け、1859年の開港とともにピアノ、リードオルガンを携えて来日した。これは禁教下の家庭礼拝に使用するためだった。今年が開港150周年、宣教師来日150周年であるが、近代日本(本土)におけるリードオルガン150周年、キリスト教礼拝音楽150周年であるとも言える。

前身校を含めた明治学院の卒業生、教員の中で、音楽家として最初に頭角を表したのはヘボン塾に学んだ角谷省吾である。彼は日本人として最初期のオルガニストである。バラ学校に学び、築地大学校明治16年卒の西村庄太郎もオルガニストで小山作之助に音楽を指導している。新潟出身の小山作之助は築地大学校で放課後西村庄太郎のもとで学び音楽に開眼した。

讃美歌の編集や作詞作曲に関った明治学院関係者も多い。ヘボンの日本語教師、日本最初の讃美歌作詞家奥野昌綱は東京一致神学校聴講生で、讃美歌《知恵とちからの》、《わが君イエスよ》、《やまいの床にも》、《キリストのまえに》を作詞、『教のうた』(明治7年)、『讃美歌 全』(明治14、15、16年)、『讃美歌 改定増補』(明治16年)、『新撰讃美歌』(明治21、23年)、『童蒙讃美歌』(明治23年)を編集している。ヘボン塾教師ルーミスは奥野昌綱とともに明治初期讃美歌集『教のうた』(明治7年)を編集・出版した。

東京一致神学校、明治学院神学部教授のアメルマン(1843～1928)は『基督教聖歌集』(明治17年)を編集。明治21年に普通学部本科に入学した詩人、小説家、評論家の岩野泡鳴(本名、美衛)も『基督教聖歌集』(明治17年)を編集している。

東京一致英和学校教授マクネア(1858～1915)は『讃美歌』(明治38年)、『讃美歌 第二編』(明治43年)を編集、『讃美歌物語』を著した。

明治21年神学部卒の牧師尾島真治には『讃美歌集』一卷があり、《エスのみまえにとこしなへの》『リバイバル聖歌』、《かみのちからなりちゑなれども》『リバイバル聖歌』の作詞者である。

社会事業家、伝道者の賀川豊彦は明治40年高等学部神学予科2年終了、《身にせまる宇宙の神秘》『青年讃美歌』を作詞。『日曜学校讃美歌』(大正12年)の編集委員で、神学部卒でダンス王の玉置真吉も『日曜学校讃美歌』(大正12年)を編集している。

明治43年神学部卒の中山昌樹は明治学院教授になり、ダントの研究で著名、『讃美歌』(昭和6年)、『青年讃美歌』(昭和16年)、『讃美歌 改定版』(昭和24年)を編集、《えらびうけし青年われら》『青年讃美歌』、《めぐみゆたかにわれらをまもり》『青年讃美歌』を作詞した。

大正3年神学部卒の宮川勇は『新興讃美歌 第1、2編』(昭和7年)を編集、讃美歌《わがものすべては》、《主を仰ぎ見れば》、《うれしや春べは》、《あらたまの》、《波風あらぶる》を作詞した。

明治学院教授ハナフォード(1887～1973)は『讃美歌』(昭和6年)、『青年讃美歌』(昭和16年)、『讃美歌 改定版』(昭和24年)、『讃美歌』(昭和29年)を編集した。

大正7年高等学部卒の木岡英三郎は《こころのやど》『あかつきに』作曲。日本におけるバッハ・オルガン曲の最初の本格的紹介者である。『讃美歌』(昭和6年)、『教会礼拝合唱及び独唱曲集』(昭和14年)、『青年讃美歌』(昭和16年)、『The Hymnal』(昭和23年)、『讃美歌 改定版』(昭和24年)、『The English Hymnal』(昭和30年)、『カルヴィン韻律詩篇歌集』(昭和32年)、『女声聖歌コワイア・ブック 第一集』(昭和41年)、『教会コワイ・アブック第一～二集』(昭和58、51年)を編集した。

大正4年中学、7年高等学部、10年神学部卒の鳥居忠五郎は『日曜学校讃美歌 改定増補』(昭和3年)、『讃美歌』(1931昭和6年)、『青年讃美歌』(昭和16年)、『讃美歌 改定版』(昭和24年)、『讃美歌』(昭和29年)、『こどもさんびか 1 改定版』(昭和41年)、『讃美歌 第二編』(昭和42年)、『こどもとおかあさんのうた』(昭和53～56年)を編集、『白金聖歌』、讃美歌《朝日はのほりて》、《羊はねむれり》、《わがものすべては》、《あらたまの》、《はるかなる》、《今こそ声あげ》を作曲、オルガン曲集『やさしい奏楽曲』(昭和59年)を出版した。木岡英三郎とは同期生である。

昭和26年中学校、昭和29年高校、昭和33年大学卒の園部順夫はオルガニストで「オルガニストへの注意(第7回教会音楽全国講習会より)」『聖歌の友』第106号(昭和52年)を著した。

また卒業生ではないが、明治学院高等学部教授の安部正義(1891～1974)は讃美歌《馬槽のなかに》、明治学院中等学部歌「白金の丘」作曲、オラトリオ「ヨブ」(昭和40年)作曲・出版した。『日曜学校讃美歌』(昭和3年)、『讃美歌』(昭和6年)、『青年讃美歌』(昭和16年)、『讃美歌 改定版』(昭和24年)を編集した。明治学院大学グリークラブ常任指揮者の池宮英才(1924～2003)は『教会讃美歌』(昭和49年)を編集し、『音楽辞典』を出版した音楽評論家の小泉洽(1894～1971)は戦後明治学院高校、および大学の非常勤講師だった。

牧師でジャズも巧みな前讃美歌委員久世望氏も高校の卒業生である。

卒業生に、尾島真治、中山昌樹、宮川勇、木岡英三郎、鳥居忠五郎、園部順夫を輩出し、教授陣ではルーミス、アメルマン、マクネア、ハナフォード、安部正義と多彩で教会音楽における歴史の王道を歩いてきたような感があるが、「明治学院と音楽(讃美歌)」を考えると、特に讃美歌では明治学院の教授であった植村正久を忘れることはできない。

植村正久(1858～1925)は、江戸の旗本の長男として生まれ、幼名は道太郎。横浜、バラ塾、ブラウン塾に学び、明治6年、17歳の時J. H. バラから受洗。明治12年東京一致神学校を卒業、下谷教会、番町一致教会(後の一番町教会、富士見町教会)の牧師をつとめた。明治22年明治学院教授に就任、明治36年明治学院教授を辞して明治37年東京神学社(現東京神学大学)を創設、牧師を養成した。明治13年小崎弘道、井深梶之助と東京キリスト教青年会を組織し、機関紙『六合雑誌』を創刊。明治16年『東京毎週新報』、明治23年『日本評論』、『福音週報』(後の『福音新報』)を創刊して主筆となった。『真理一班』他著作は多数存在する。

植村はキリスト教界きっての論客であり、ワーズワスの評伝を『日本評論』に発表するなど英文学にも精通し、バーンズ、ロングフェロー等の詩を数多く訳している。また讃美歌も多数翻訳し、讃美歌集の編集、そして讃美歌論も展開している。翻訳に関しては、島崎藤村の詩《逃げ水》(『若菜集』所収)に影響を与えた《ゆうぐれしづかに》(S. R. ブラウンの母、フィービ・ブラウン作)を翻訳したことで知られる。

植村正久の讃美歌に関する主な業績は以下の3件があげられる。

1) 明治16年、『東京毎週新報』に「讃美歌編輯の事を記す」を投稿した。これは日本人による最初の讃美歌論である。

ここでの植村の発言の中には、単にその時採択されていた讃美歌編集のための提言のみならず、「ことば」というものをどのようにとらえるべきかという現代にも通じる問題も含まれている。そして、彼の「考案」のうちミーター(詩形)に関する発言は、日本人が近代という枠組みを通ることによって再認識した「日本的なるもの」(七五調)を垣間見るようで興味深い。来日した宣教師とその協力者である日本語教師が、ミーターとその曲のパターンを組み合わせる作業を繰り返すうちに、日本的な詩形というものを見出していったのであろう。それなくして「一音符に一音を」を意味するような発言がありえただろうか。現在では歌を歌う上で自明なことがここにおいて確立していった。

彼が「考案」の第一にかかげ、もっとも多く紙面をさいて論じている問題は「ことばの選択」という問題である。「ことば」を文化の中に位置づけていく時に彼は「雅俗」という考え方をを用いているが、その基準とは彼の時代にふさわしいものであるか否かということである。学者の言によるものでも、古書や、その言葉の来歴によるものでもない。その言葉を選択するかどうかは、まさに近代を生きるこの時代の人間自身が決めることなのである。彼のその論調は、旧弊を否定し、近代化を強く望むものの典型のようにも見えるが、彼の投げかけた問題は、時代を経て現代に生きるわれわれにもつねに課されている問題であろう。「考案」の「第五」で彼が述べている考えは、みごとに『新撰讃美歌』に生かされたと言うべきであろう。従来歌われてきた讃美歌の集大成になることなく、その内容の多くをいわば新作によっている。そして一人の主観によってまとめられた讃美歌集になることなく、多くの英知を集めることによって、6000人もの信徒の心をみずみずしく潤すものとなったのである。それは日本の讃美歌の未来を見すえた意欲的な讃美歌集と言えよう。

2) 明治21年、『新撰讃美歌』の編集の中心を担った。そしてこの『新撰讃美歌』は彼の讃美歌論の結実と言える。

序文3には、編集者と編集過程、編集者(著者)とその実務内容、収録された讃美歌の典拠、著作権(現在の著作権とは異なる)、出版の目的、そして出版費用を負担した湯浅治郎氏への謝辞が書かれている。植村正久は委員の筆頭にあげられており、また英語讃美歌から多数翻訳されたが、この翻訳に植村正久が関わっていた。

日本人として歌いにくいはずの3拍子の曲も多く、曲だけの難易度でいえば現在まで出版された讃美歌集の中で最もレベルの高い讃美歌集と考えられる。別所梅之助は「なにせよ、『新撰讃美歌』あって、日本のキリスト教会は、はじめて讃美歌らしい歌集を得たのです」と述べている。

また、新体詩に対して、形式的、ローマン主義的、恋愛至上主義的影響を与えたことで文学的評価も高い。

3) 讃美歌に関する論文、記事、エッセイ等を雑誌、新聞等に多数執筆した。これらの記事が『植村正久と其の時代』や著作集、全集に纏められ、明治ばかりでなく、大正、昭和の讃美歌に関する貴重な情報源となっている。

特に『植村正久と其の時代』で讃美歌と唱歌の関係を論じていることと日本の最初の讃美歌学者と言ってよいユニオン神学校でマスター論文を提出した松本幹(つよし)について記述があることが特筆される。

松本幹は、戦後の明治学院の学校運営、英語教育に活躍した松本亨の兄であり、昭和5年に高等学部を卒業、オルガンの演奏にも秀で、ユニオン神学校に留学、『讃美歌』(昭和6年版)について昭和10年に論文を提出した。しかし日米戦争という時代の波にさらされ、その後讃美歌には関らずアメリカに帰化してアメリカでの生活を送った。現在カリフォルニアのサンディエゴ郊外ラホヤの公園に埋葬されている。平和の時代であれば戦後の日本の讃美歌学の中心人物になっただけなのに、讃美歌、明治学院に関する者として大変残念に思う。

最後に校歌について簡単に触れたい。アルフィーもCDの作成に参加しているが、最初聞いたとき何と難しい曲なのかと感じた。明治24年普通学部卒の島崎藤村作詞、前田久八作曲のこの校歌は単純なリズムやメロディーが繰り返される通常の校歌とは異なり、流れるような旋律が絶えず変化し、最後まで続く。歌詞と曲が見事に一致し、聞けば聞くほど味わい深いものがある。校歌の中でも傑作中の傑作と言っても過言ではないのではないかと考え、聞いて頂く機会をつくりたいと思っている。

(当学会副会長)

## ★当学会顧問、皆川達夫氏が

**第60回(平成20年度)日本放送協会 放送文化賞を受賞。**

心よりお祝い申し上げます。

## ★役員会報告

①日 時：2008年11月30日(日) 14:00-

場 所：東京芸術劇場5F喫茶店

出席者：新垣、伊東、金澤、佐々木、塩谷、手代木

議 題：学会誌、ニューズレター、大会について

②日 時：2009年2月1日(日) 14:00-

場 所：東京芸術劇場5F喫茶店

出席者：伊東、金澤、佐々木、手代木、(加藤拓末氏:明治学院大学博士課程・・・大会打ち合わせのため)

議 題：●大会の詳細な企画について・・・場所、講師、会費の決定

●大会案内、総会資料、選挙用書類等について

●ニューズレター

③日 時：2009年3月22日(日) 14:00-

場 所：東京芸術劇場5F喫茶店

出席者：新垣、金澤、塩谷、手代木

議 題：●大会の詳細確認

●大会案内、総会資料、選挙用書類等の確認

●学会誌、書誌について

## ★新会員

鈴木千帆(東京)、若山晴子(神戸)

加藤拓末(東京)、安積道也 ※2009年4月から

## ★募集

●2009年度大会研究発表者若干名・・・出来れば大会テーマに沿った内容が望ましい。

## 締め切り2009年4月30日

(今回は募集が大変遅れてしまいましたことをお詫びいたします。次回からは余裕を持って募集させていただきます。)

●学会誌第9号 2010年4月発行予定。

## 原稿締切 2009年11月30日

## ★学会誌発行予告

第8号 学会誌・・・4月半ば刊行予定

内容●巻頭言・・・手代木氏

●論 文・・・ヘンゼラー氏、故丹羽氏

●書 評・・・赤井氏、手代木氏

●第8回大会プログラム・報告・・・手代木氏

## ★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつもご支援をいただき感謝申し上げます。下記の口座に2009年度の会費をお振込みくださいますようお願い申し上げます。2007年総会で決定された会則改正により、2008年度分からの会費は変更となっております。

キリスト教礼拝音楽学会 東北地区部会

郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)

年会費：正 会 員 6,000円(2007年度までの分は5,000円)

準 会 員 3,000円

賛助会員 20,000円

●振込用紙には\* \_\_\_\_年度/正・準・賛助会員/会費の金額を必ず明記の上、ご送金ください。

●住所変更等も、お知らせください。

●会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ

〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1101

TEL/FAX022-262-6565 Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp